
ソーマッド公爵家の娘

在庫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ソーマッド公爵家の娘

【コード】

N2995Q

【作者名】

在庫

【あらすじ】

少女が父に望んだことはただひとつ、それは親子の縁を断つことであつた。「私、アイリス・ソーマッドをソーマッド公爵家の籍から外して頂きたい」「あい、わかった」そうして、親子の物語が終焉する。これは公爵家の娘として生きようとして諦めた、少女の回想記。【初恋葬送と同様に「アクロス王国」を舞台にした物語です】

【序章・物語の結末】

少女が大邸宅の主である男の部屋に足を踏み入れたのは、今この時が初めてであった。

少女と男の関係性からして大変可笑しなことだと首を捻りたくない事実であったが、どうにも本当なのだから致し方ない。

さほど厚い作りでもない、極普通の部屋の扉を開くのにどれほどの勇気と決意と諦めが必要であったかは、扉を開けた当人である少女だけが知るところで、椅子に座し少女を視線で射抜いてくる男が理解するはずもなかった。

冷たい視線に、少しばかり少女の肩が震えたが、それでも両者の対峙は続く。

ここまで敵意をむき出しにしてくる男の姿を見るのは久しぶりだった。長らく、普段の柄にもなく男は穏やかで温もりある瞳をしていた。無論、原因となったのが男の前に立つ少女であるはずもない。その瞳が向けられる先に居るのは、常に少女とは異なる女である。

いい加減決着をつけよう。やっと、そう決めた。そして重々しく感じていたこの部屋の扉を開いたのだ。鋭利な刃物に似た視線に怯む暇すら勿体ない。

たとえ幼心が下したワガママ勝手な結論だとしても、これ以上、少女は誰に対しても譲ってやる気など皆無で。ここまで尽くしてきたのだから終幕のファンファーレを鳴らす権利を頂戴したとて悪くあるまい。

「すでに、天秤は傾いたのでしょう？」

少女が発した開口一番の言葉はやけに曖昧な問いであった。

けれど、少女の問いは正しく汲み取られたらしく男の眼が僅かに見開かれた。凜々しい眉までもが訝しげにひそめられている。男の

予想とはあまりにかけ離れた話題だったのかもしれない。

男の表情の移り変わりを見て、今度は少女が目を見開いた。

親類縁者をも含む周囲に「無表情・無感情な男」と評される男が、かの女以外の者に感情を伴った表情を向ける事など、かつてあっただろうか。

無感情の仮面を一度でもいいからは自らの手で外すことが、少女の切望した夢であった。更に生きる意味であり生きる価値でもあったといって過言ではない。それほどまでに望んだ現実が、ある意味叶ったことは少女にとって予定外だった。

しかし、よりにもよって。

こんな最後の最後で叶わなくとも、と少女は内心で肩をすかした。

「ルフィルドの約束された将来と、私の軍才。その両者を秤にかけた天秤は、すでに前者へと傾いているはずです」

「そうだ」

「左様ですか。王の許可はいつ頃に？」

「あやつはまだ幼い。三年後が妥当と考えよ」

三年後。

それが、喜劇とも悲劇ともつかない中途半端な物語の閉幕時間だ。

「一つ、私を願いを叶えて頂きたい。今より三年後。王の許可を賜り、ルフィルドの後継ぎとしての立場が確固たるものになった後で結構ですので」

「……」

含みのある少女の物言いが男の警戒心を擽った。

男は椅子から立ち上がると瞬時に帯刀している剣を鞘から抜く。

一瞬の閃光。

向けた剣先は少女の喉元へ。

「何が言いたい」

絶対零度の視線。男の氷のような殺気が少女の全身を圧迫した。多少の表情が見受けられた男の顔は、すでに、いつもの血も涙もない鉄仮面、この国の誰もが英雄と崇め畏怖する軍人のそれへと変化していた。

けれども少女は手足を震わせず、喉元数ミリ先にある剣先に怯えることもせず、視線を男に向けたまま言葉をつづけた。

実年齢に似つかわしくない振舞いは男と同じ血脈を受けつぐ故かもしれない。

「私が望むのは地位でも名誉でも財産でもありません」

「では、何だ」

少女に得て望むものはない。

『どうなったって変わらないものがある。変えられないこともある』

世界にある摂理を悟った時、少女は求めること、期待すること、夢みることを諦めた。

夢は、やぶれたのだ。ならば、もう傷つくだけの道筋を歩み続ける必要はない。

少女は捨てさることを望む。

「籍を、抜いて頂きたいのです」

「籍を、だど？」

「はい」

姿勢を正し胸を張り顎を引く。

ゆっくりと瞳を閉じ。

もう一度ゆっくりと瞳を開いた。
息を整え、はっきりと己の意思をつける。
そうして、世界は、彼女が思っていたよりもずっと広いものにな
っていく。

「私、アイリス・ソーマッドをソーマッド公爵家の籍から外して頂
きたいのです。父上」

カチャリ、と剣が鞘へと納められる音が静かな室内に響いた。

「 あい、わかった」

その返事を持ってして、少女・アイリスと、少女の父である男・
ラルフ。同じ血脈を持つもの同士の、決して交差することのなかっ
た物語は終焉を迎えることとなった。

アイリス、一四歳の春の出来事であった。

【老章・ソーマツド公爵家（1）】

母なる我らが大陸。

その北西地方一帯を領土とし支配する国をアクロス王国という。

北は海に面し、西は海と教皇国、東は数個の小国と、南は山脈を境にルフド帝国が隣接する。

冬の訪れと共に国土の大部分は雪に覆われ、北に行けば行くほど積雪量が増していく白の国でもある。

緑は豊かであるが農業はあまり盛んではなく、アクロス王国を支えているの商業だと言って差し支えない。海に面している立地を生かし、大陸と他大陸との間で行われる貿易の一手に引き受ける商業大国。

それが、アイリスが生まれ育った母国である。

建国から二百年の時が過ぎ、アクロス王国は今、大陸一と謳われる富と豊かな暮らしを手に入れ、最も栄華を極めるつつある時代に突入しようとしていた。

「建国王リツテンゼルク陛下の御世から早二百年余。わが国は歴史的にみても最盛期を迎えつつあります」

所々紙がよれていて長年の汚れが目につく古文書を片手に、歴史学の権威であるラドクリフ子爵は、アイリスそう説く。

国の歴史は人の人生と同じである、と彼はつづける。

土地に人があり階級が生まれやがて国が誕生する。子どもが成長するように国もまた立派に大きくなり最盛期を迎える。最も英知があり体力がある華やかな時代が過ぎれば、あとは、古い枯れ果てるだけである。古来より、歴史はそれを繰り返し、大小多数の国が生まれては消えていった。

飛ぶ鳥を落とす勢いを持つアクロス王国も、やがては斜陽の時代

が訪れる。

「栄枯盛衰の歴史の螺旋から唯一逃れられているが、隣国ルフド帝国ということなのでしょうか」

ラドクリフ子爵の講義に耳を傾けながら、要点だけを羽根ペンを使い手元の羊皮紙にまとめつつ、アイリスは素朴な疑問を横に立つ彼にぶつけた。

南の隣国にして同盟国であるルフド帝国はすでに千年程の歴史を刻んでいる大陸最古の国。大陸全土を己がものにした数百年前が隆盛であったとはいえ、ルフド帝国は一定の国力を有したまま未だに滅びることなく地図上に堂々と居座り続けている。

「逃れられている、という表現は面白いですね」

クスリとラドクリフ子爵は笑みを浮かべた。

アイリスが彼に対して愉快的質問や有意義な質問をする度に、彼はこうやって口角をあげる。

子爵曰く。それは弟子が知識を吸収し学びを得ていく瞬間であり、とても喜ばしいことなのだそうだ。

「確かに帝国は例外です。今後もしばらく帝国が滅びることはないでしょう」

もしかしたら千年ほど先まで名を紡ぎ続けるかもしれない、と彼は言う。

「けれど、やはりそれは永遠には続きません。帝国とてじっくりと時間をかけて老いていつているのです。ただ、他の国より衰退の速度がゆっくりなだけなのですよ」

彼は古文書をパタリと閉じると「この本だっけいずれは忘却のかなたです」と目を細めた。

「……そうですか」

ラドクリフ子爵の細められた目にゾクリとしたものを僅かに感じ、アイリスはつい椅子に座したままたじろぎそうになったが、すぐに思いとどまることに成功した。

母国の栄華を固辞も贅美もせず、さらにその先を見据えての教えを説くラドクリフ子爵は極めて現実的な思考の持ち主であると言えたが、愛着があるであろう母国アクロス王国の事も、自身の研究対象であるルフド帝国に関しても何の装飾もつけない姿勢は、人間味にかけているようにも見えた。

アイリスは、彼のそういう所が少し苦手だ。

とは言っても、ラドクリフ子爵はアイリスの歴史や文学の指導役であり接する機会は断然に多く、また彼の知識量や見識の鋭さは尊敬に値する。故に、アイリスが表だって彼への苦手意識を表現することはほとんど無かった。

「将来、アクロス王国が老いていくのならば、私は見守るばかりでしようね」

大陸の北西の果て。

この母なる地が斜陽の陽に染まる日が訪れたならば、アイリスはその流れを見守るしかない。

「国も老い、やがては死を迎える。人にある生と死の如く。

問題はいかにその衰退の速度を遅くし、栄華の時代を出来るかぎり存続させていくかです」

ラドクリフ子爵の瞳にアイリスの姿が反射している。

彼は再び口角をあげ笑みをつくる。

教え子を見守るような、奮起させるような視線には「さて、貴女様ならどうするのか」という挑戦が含まれているように思えてならない。

けれども、進むべき道がきまつているアイリスは繰り返し同じことを答えるだけであった。

「やはり、私は見守るだけですよ」、と。

「国を導き動かしていくのは王家や官僚の役目ですので。私の出る幕ではございません」

「なにを情けないことを仰ります。貴女様の先祖にはアクロス王国の初期を支えた名宰相であらせられるローレン氏だっておいでであると言つに」

「ラドクリフ卿。ソーマッドにおいて、後にも先にも文官を志したのは彼以外おりませんよ」

彼が口にしたローレンとは、アイリスから数えて十一代前の祖先にあたる人物である。

四代国王アーサーの御世に活躍し、最終的には宰相の地位までに上り詰め、数々な実績を残した名の知れた過去の偉人。少女の出自であるソーマッド公爵家は歴代有能な人物を輩出しているが、ローレン・ソーマッドがその中でも群をぬいて異質であると言える。

「私もまた父と同じく、武官になるのが役割でございますから、王家や国を守ることしか奉仕は許されません」

「貴女様の才は政治にも向いていると思うのですがね」

「それほどまでの評価を頂けるのは光栄ですが、学習も鍛錬も、勿論、この講義も。」

「全ては軍人になるための布石です故」

それが定められた唯一の事柄だということを、アイリスは嫌というほど痛感している。

ソーマッドの家に生まれた日より、アイリスの生きる道はただ一つであった。

「これも、ソーマッド公爵家の定めというものでしょうかねえ」

アクロス王国の名門貴族ソーマッド公爵家。

それが、アイリスのルーツであり世界である。

アクロス王国の始祖となったリッテンゼルク建国王に仕え、王の右腕とまで称された天才軍師ガイ・ソーマッドが公爵位を授けられたから、現在まで脈々と続いている家柄。

ガイが剣によって王に忠誠を誓ったことに倣い、ソーマッド家の者は武によって王への忠誠を誓うことが多く、代々、優秀な軍人を輩出している。『剣をもって義を尽す』ことが家訓とされるほどである。

現在のソーマッド公爵家当主は、アイリスの父である、ラルフ・ソーマッドだ。

幼いころから父に才能をかわれ、ソーマッド公爵家唯一の子であるアイリスは、女子の身ながらにして公爵家の後継者になること、ひいては軍人になることが定められた身であった。

「『剣を持って義を尽す』。それこそが、ソーマッドです」

はつきりと言い切ったアイリスの瞳に、迷いはひとつも感じられなかった。

彼女の横顔に、現当主ラルフの面影が微かに重なったのは夢幻か。アイリスの物言い、身のこなしは、齢十一の少女のものとは思え

ぬことばかり。

上流階級の同年代の同性が社交界デビューに向けて可憐な生活を送る中、アイリスただ一人が、学問にはげみ鍛錬に精進しているのだった。

がああああん……、ごおおおん……。

遠くから、教会の鐘の音が二人が居る部屋まで届いてきた。微かな振動を伴った低音が、講義終了の合図だ。

「それでは、今日の講義は終りにしようか、アイリス・ソーマッド嬢」

「それでは、また来週の講義の時間に。本日もありがとうございました、ラドクリフ卿」

公爵家の跡取りにふさわしい人間になるために努力を積み重ね続けた少女の人生に、転機が訪れるのはこの翌日。

とある女性との出会いが、アイリスの道筋はぐらりぐらりとくずれていくのである。

【志章・ソーマッド公爵家（1）】

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2995q/>

ソーマッド公爵家の娘

2011年1月26日11時36分発行